彼女たちのオフィスで

左能典代

新潮社

彼女たちのオフィスで

左能典代

新潮社

彼女(かのじょ)たちのオフィスで

著者／左能典代(さのふみよ)

*

印刷／昭和63年3月15日

発行／昭和63年3月20日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

*

印刷所／株式会社光邦

製本所／植木製本株式会社

*

定価／1100円

© Fumiyo Sano 1988, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-353502-4　C0093

彼女たちのオフィスで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

1

約束の時間きっかりに、津川柚子は東京・大手町の東京物産株式会社のドアを押した。

「お待ちしてました」

ドアの右手から男の声が飛んできた。東京物産商品開発部の山際靖彦だった。

資本金三十五億、社員総数六百五十名、社歴四十年の東京物産は調味料の開発と販売を主な業務としている第一部上場会社だが、最近ははやりの情報産業にも進出し、いっそうの事業拡張を計っている。

山際はホテルのボーイのように礼儀正しく一礼し、柚子をエレベーターに乗せた。柚子は目を丸くして驚いた。東京物産とは丸三年のつき合いになるが、出迎えを受けるなど初めてのことだ。まるでＶＩＰ扱いだ。思いがけないことがあるものだ。

「私も出世したものですね」柚子は上昇するエレベーターのフロア表示の点滅を見詰めている山際に冗談を言った。柚子の視線をわざと外すように山際が視線を床に落とす。山際は三十二、三歳だろう。彼を窓口に二、三回仕事をしたことがあるが、やりにくい男ではなかった。しかし今日の山際は初対面のようによそよそしい。

エレベーターが三階で止まる。いつもはこの階で降りるのに、山際は動かない。柚子はエレベーターの入口の角に案山子のように立っている山際の横顔をチラッと見た。柚子の目配りに不審の色を感じたのか、山際はあわてて、

「今日の会議は八階です」と言った。東京物産の八階にあがったことは、まだない。いつもと様子が違う。

八階でエレベーターを降りる。

「こちらです」右手でドアを抑えながら山際が促す。彼の仕草は依然ぎこちない。柚子は山際の二、三歩うしろをついて行く。山際がつきあたりの部屋のドアを押した。室内に一歩踏みこんだとたん、柚子は声をあげそうになった。

男たちの目が、いっせいに柚子に向かってきた。三十人はいる。「いったい、どういうことなの？」入口で棒立ちになったまま、柚子は頭の中で叫ぶ。顔がこわ張っていくのがわかる。柚子は山際に案内され、席に腰を降ろした。動揺を見透かされてはシャクだ。柚子は視線を意識的に右から左にゆっくり流してみた。顔見知りの者が数人いた。東京物産の社員が大きな窓を背にして五人陣取っていた。部長の斉田吉造が正面中央にいる。痩せてエラの張ったゴツゴツの四角い顔に土色の皮膚をした斉田は裁判官のように無表情だ。彼はついこの間の人事異動で商品開発部長に昇格したばかりだ。しかし、斉田と仕事をしたことはない。

「オフィスAの津川さんがお見えになりましたので、さっそく本題に入らせていただきます」課長の紺哲明が言った。彼は斉田に引っ張られ、商品開発部に移ってきたという噂だ。

「なにが始まるのだろう」柚子は想像がつかなかった。

「本日のテーマでありますこの冊子は……」言いながら紺が週刊誌の半分のサイズの本を一冊高

高と挙げて、全員に見せる。オフィスAが企画して、東京物産の当時課長だった外間太三に売りこみ、軌道にのせることに成功した商品だ。成功の鍵は、他企業の記事広告をも巧みに織りこみ、その広告を掲載した企業に冊子を買い取らせる商法にあった。企業は自社商品と絡めて冊子を客にプレゼントした。デザインも美しく、従来のPR誌の域をはるかに越えていたため評判はよく、発行部数は年々ふえた。たかが小冊子とはいえ、東京物産商品開発部には新商品開発のための情報が以前にもまして入るようになり、部内は勢いづいた。柚子が戦略戦術誌と名づけたこの冊子の金銭上の契約をオフィスAは制作費と販売総部数の一パーセント・マージンの両方から結んだ。この契約はオフィスAが制作を担当する限り、有効であった。しかし制作担当の期間に関しては契約書に触れていない。

「企画、編集、取材、執筆、デザイン、完全版下までの全作業を津川さんの会社に依頼し、過去三年間、大成功をおさめました。販売部数も、すでにご承知かと思いますが、昨年は前代未聞の部数に達しました。今年は四年目です。そこでわれわれは新しいスタッフを編成し、販売部数をさらに伸ばそうと考えておりますので、みなさまのご協力をお願いする次第です。まず初めに、仕事の内容をすみずみまでご存知の津川さんに制作上の注意点など、貴重なご体験をお話ししていただきたいと思います」紺が笑みを絶やさず、会議の目的をよどみなく告げる。出席者全員に山際が冊子を一部ずつ配っている。「新しいスタッフ?」男たちの手帳やノートを開く音が柚子の耳にざらつくように響く。

「きたないわ!」

柚子が来るまでに、すでに説明会は終わっていたのだろう。柚子には時間をずらして会議に出席させるよう仕組まれていたに違いない。柚子が現れるのを待って冊子を配るとはしらじらしい。

闇打ち同然の会議の意味を柚子はやっと飲みこんだ。山際が玄関に出迎えたり、ぎこちない態度で八階まで案内した理由もわかった。

「ひるんではいけない。オフィスAの意地にかけても」柚子は自分に言いきかせる。男たちは法廷の傍聴人のように黙って柚子の説明を待っている。

口いっぱいに苦い液がひろがり、吐き出したくなる。

なんて言おうか、柚子は第一声を頭の中で考えた。「早く言えよ」と言いたげに、ドア近くに座っている男がボールペンを指の間で弄んでいる。どこかで会っている男だ。広告業界の大手・大洋広告社の社員のような気がする。

「皆さん、ライバルです。ライバルにどうして私の会社のノウハウを教えられますか」

精一杯突っ張った柚子の切り返しに、ドア近くの男がニヤリとほくそ笑んだ。筆記用具をコロンとノートの上に転がした男の目が「男には切れないタンカ。やれやれ」と言っている。冊子を無雑作にぱらぱらめくり始めた男もいる。紺が斉田に耳打ちした。会議をこじらせてはまずいとでも言っているのだろう。斉田は口をへの字に結び、正面を見つめたまま軽くうなずいた。

「それでは皆様の商品見本提出日を私の方から指定させていただきます」柚子を無視することで斉田と紺は意見の一致を見たのだろうが、紺のこのひとことで説明会はすでに終わっていたことを柚子は否応なく知らされた。紺がとくとくと企業の名前を読みあげていく。オフィスAは五月十三日と指定された。

なぜ提出日を同じにしないのか……。

会社名を読みあげる紺の口調は、依頼ではなく、命令的に聞こえる。

紺の声が止む。

「十五社も来ている」集まった会社の数に柚子は改めて驚いた。たかだか百頁の冊子制作に大小企業合わせて十五社も群がるとは。各社の思惑で会議室はむんむんしていた。

「本日はこれで散会します」

紺が散会を告げると、柚子とほとんど同じタイミングで、ドア近くに陣取っていた三人が立ちあがった。紙袋に印刷された文字から、三人は柚子がにらんだ通り、大洋広告社の社員だった。確実に得意先とならないうちは、彼らはいつでも腰を上げられるような位置に席をとる。それを職種から学びとった彼らの謙虚な姿勢と感心するむきもあるが、柚子には彼らのずるさとしか映らない。しかし、ひとたび得意先に決まると、絨緞に頭がつくくらい腰を低くする連中だ。柚子は表情を変えず、いつもの足どりで会議室の外に出た。背中に汗が噴き出ている。早く表の空気を吸いたい。エレベーターのボタンを押す。ドアがゆっくり開く。柚子だけが乗ったエレベーターのドアが閉まりかかったとき、誰かがボタンを押した。ドアが再び開く。男が三人乗ってきた。一人が「閉」のボタンを押す。男はなぜか急いでいるらしい。四人を乗せたエレベーターが降り始めた。

「私、保科と言います」柚子のすぐ隣りに立った男があわただしく名刺を差し出した。東西印刷株式会社営業課長保科郁夫。頭が空白のまま柚子は名刺の文字を追った。

「ちょっとお時間をいただけませんか」保科が言った。痩せた小柄な体軀に杉綾模様のグレーの上着を着、はでなチェックのネクタイをしている。営業マンには珍しい陰気な雰囲気が肩に漂っている。他の二人は部下らしい。

「ご用件は？」柚子は保科の顔を見た。

「ここでは、何ですから」保科は説明を拒んだ。

「密室ですよ」
「しかしエレベーターの中では」
「時間が短すぎますか」柚子は保科の誘いに消極的だった。
「三十分ほど、いかがでしょう」保科は諦めなかった。仕方なく柚子も承知する。東京物産を出ると、四人は大手町の地下街に潜りこみ、小さな喫茶店に入った。柚子は相手が内容を語ってくるまで、ひとことも喋りたくない。ハンドバッグから煙草を一本取り出し、吹かした。コーヒーが運ばれ、ウエイトレスが去った。
「うちの会社と組んでいただけませんか？」保科が唐突に言う。
「組む？」保科が何を言いたいか、柚子は見当もつかない。保科に真意を語らせる方が先だと思った。
「この仕事におけるオフィスAさんの功績はわれわれの業界では評判ですよ」
保科がオフィスAを褒める。柚子はコーヒーを飲み、煙草を吹かしているだけで黙っていた。
「オフィスAさんの仕事がみごとだったので、東京物産の当時の関係者は全員昇格しました。もちろん、ご存知ですね？」保科は続けた。そんな事は知っている。外間太三も課長から次長に昇格して部を変わったのだ。
しかし、今そんな話を聞かされても嬉しくはない。
「要点をおっしゃってください」
「うちのプレゼンテーションは五月十二日です。オフィスAさんはその翌日ですね。どうでしょう、わが社の企画が採用された場合、制作をおたくに依頼したいと、うちの企画書に書きたいのです」周囲の目を気にするように保科はグッと声を落とした。保科の顔に一抹のためらいが見え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。しかし目は「損な取引ではないでしょう」と言っている。
「それはあなたの自由です」
東西印刷は効率のよい制作を考えている。保科の本音は数百万部の印刷を自分の仕事として確保したいだけだ。営業マンなら当然だ。
柚子は腕時計をのぞいた。四時を十分ほど回わっていた。あわてて会社に帰ることもなかったが、わざと次の約束がある素ぶりを目の前のかしこまっている男たちに見せつけたかった。
「失礼します」柚子は席をたった。東西印刷の男たちもつられるように腰を上げた。外に出ると、柚子は公衆電話にテレフォンカードを入れた。三枝素子が出た。
「会議、なんだったの?」素子が先に喋る。
「おもしろい話よ。みんな、いる?」柚子がもったいぶる。
「いるわよ。いい話?」素子が結論を聞きたがる。
「すっごく刺激的」柚子は、今結論を言って、味気ない事件に終わらせたくなかった。
「早く聞きたいね」素子がせかすように言う。素子の気分も高まっていったらしい。
「すぐ帰るわ」
柚子は地下鉄に飛び乗った。地下鉄の中は蒸し暑かった。霞ヶ関で柚子の前の男が席を立った。柚子はそこに座った。開けられた窓から流れこんで来る風が柚子の首筋にあたる。気持がいい。柚子は目をつぶった。が、風が運んでくる首筋の気持よさとは反対に、心は今日の会議の様を素子はどう受け止めるだろうかという不安に満ちていた。素子の感想を早く知りたかった。
五年前、柚子は三枝素子に男の友人の経営する会社で偶然出会った。紅葉の季節だった。数人のスタッフでコマーシャルを専門に制作しているその男が素子を紹介した。三人で近くの喫茶店

に入り、お茶を飲んだ。初対面の者への警戒心からか素子は寡黙だったが、ときどき薄い唇を紙一枚入るくらいに開いて、短い辛辣な言葉を飛ばしていた。頭の回転がはやい。素子は先に席を立って、帰った。「どういう女?」柚子は友人に聞いた。「変わった女だ。医者くずれらしい」と友人が教えた。「……」「O大学医学部を卒業して、しばらく脳外科に籍を置いていたらしいが、ある日、突然、医者の道を捨てたということだ」「なにがあったのかしら?」「知らない。本人に聞いてみるといい」顔色ひとつ変えない無愛想な喋り方は、無闇に頭を下げる必要のない医者と患者の関係の中で身につけた習慣かもしれない。「あの女、あなたのところでコマーシャルを作ってるの?」「いや、コピーライターじゃない。だけど企画力がある。原稿もうまい。ときどき敬語を間違えるけどな。敬語など使わない世界にいたんじゃあ、無理もないさ」と友人は甲高い声で笑った。柚子は素子に興味を持った。一緒に仕事をしませんか? と話を持ち出したのは、それから数日経ってのことだった。

「独身ですか」「幸運にも」素子はニコリともしない。「私と仕事をしませんか」「なぜ?」「ふたりとも独身だから」「理由にならないわ」「私たちの出会いだってあてにならないでしょう。見知らぬ者同士が組んで仕事をする。一種のギャンブルですけど」こんな人間の結びつきがあってもいいではないかと柚子は言いたかった。が、柚子のおよそ論理も情緒もない詰め寄り方に素子はビクリともしなかった。

「勝手な理由ね」素子が言った。「人間なんてあてにならない勝手なものでしょう」と柚子が言うと、素子が初めて薄笑いを浮かべた。笑うと、こけしのように素朴であどけない顔になる。「目的は?」素子の細い目がヒヤリとするほどきびしい。「老後のため」柚子はいい加減に言った。目的などなんだってかまわない。それもあてにならないものだから。「いいわよ」意外なことに、

素子はあっさり承知した。柚子が意気込んだほど、素子には相手の要望など深刻ではなかったらしい。三十歳をあと二か月で終わろうとしている柚子は同じ年の素子の協力を得て、オフィスAを設立した。資本金二百万円。会社設立の目的は長いものに巻かれずに、企画内容で大手企業と闘うことだった——。

オフィスのドアを開けると、三人のスタッフの目がいっせいに柚子に集中した。一刻も早く、柚子のニュースを聞きたいらしい。みんな、胸のすく話を想像し、期待している。

「お茶をいれてくれない？」柚子が山下真智子に頼む。真智子はオフィスAでは一番若い女性だ。オフィスAに来る前は花屋の店員をしていた。柚子に花を届けに来たとき、オフィスAの女たちの活気にひかれたらしく、自分から申し出て半年前に入社した。真智子はみんなのお茶もいれ替えて、席に戻った。真智子だけがお茶も飲まないで、柚子の顔をしげしげ眺めている。

「はめられたわ」熱いお茶をひと口飲むと、柚子はおもむろに言った。

「仕事を取り上げられたの？」素子が顔色も変えずにズバリと言う。こうも勘がいいと、話が早いというより、却って話しにくくなる。

「まだそこまではいってないけど、斉田さんはどうやらオフィスAをお払い箱にしたいらしいわ」と言って柚子は気まずい笑いを浮かべた。誰を笑ったのか、自分でも定かでない。

「オフィスAをクビにするための会議だったんですか？」樋口道子がハスに構え、目玉だけ柚子に向けた。大手化粧品会社の広報課に籍を置き社内報を編集していた道子は、三年前の二十五歳の春、オフィスAに入って来た。入社の動機は、大手企業における女の使い方に限界を感じたからだということだった。入社するや、道子は冊子編集とアートディレクションの助手となり、一人前以上に働いている。

「斉田さんの本心がなんであれ、競合プレゼンテーションを開けば、一応フェアでしょう。表向きはフェアな形をとって、裏で落とす。オフィスAの企画はよそより劣っていた、どうしたんですか？　今年は、なんて。もっともらしい理屈はいくらでもつくわ」柚子の判断は悪い方に傾いていく。

「人事異動のせい？」素子が言った。

「多分、そうでしょうね。斉田さんは自分の力を見せたいのよ」柚子が自信ありげに言う。

「どんな会社が呼ばれていたの？」素子が聞く。

「大洋広告社、東西印刷など大手の広告会社、印刷会社が十社も来ていたわ。あとは、小プロダクション、と言っても粒ぞろいだけど」

「印刷会社はどこでも制作室をもっているけど、企画はまったくヘタ。創造力が欠落してるのに最近はなんでも制作したがる」素子が印刷会社の泣きどころをつく。

「東西印刷の保科という課長がこの仕事をオフィスAと組んでやりたいと、さっそく言ってきたわよ」柚子が喫茶店での一件を話す。

「どういうことですか？」真智子が質問する。小柄な真智子の小さな肩に力が入っている。

「取引よ。印刷会社は印刷を一手に引き受けて、それで儲けなければいけないでしょ」

柚子は保科の下心を見すかして、真智子に教えた。

「三年間は成功した。だから四年目も成功するって信じこむなんて、甘い、甘い」素子が乾いた口調で言う。

「保科さんをからかってるのか、偉大なるわがオフィスのあさはかさを非難しているのか、どっちかしら？」柚子が冗談半分に聞く。

「両方にきまってるじゃない」素子は柚子の迷いを振り払うように鋭い口調に変わる。
「すごい企画を立てれば、斉田部長だって満足するかもしれませんね」若い真智子が肩に力を入れたまま、まっすぐ柚子を見て言った。企画の良し悪しとは関係ない斉田や紺のしたたかなずるさを知らない目だった。
「そうだといいんだけど」真智子の希望的見解を遠回わしに打ち消すと、柚子は煙草を軽く吹かした。真智子は食い入るようにまだ柚子を見詰めている。
「あなたははめられっぱなしだったの？」素子が突然からかう。
「正直なところ、陰謀を逆手にとる余裕などなかったわ」柚子が白状する。
「とにかく企業のやりそうな手ね」素子があっさりと言い捨てた。素子のこの反応に、柚子の気分も楽になった。
「みんな茶番を真面目に演ってたわ」柚子も余裕を見せるつもりで言ったが、悔しさと憤りは体の隅々まで毒のように行きわたり、胸が裂けて血が吹き出しそうだった。
「で、どうするの？」急にシリアスな顔で素子が問題解決の見通しを迫る。
「みんなの意見は？」柚子が声を落とす。
「冊子の仕事を止めると、収入が減ります」真智子がもっともなことを言う。四人の女のうち一番月給の低い真智子の不安は募るばかりだろう。
「大幅減収だわ」柚子は真智子の不安を簡単に肯定する。
「大丈夫。あんたの月給くらい、津川さんが出してくれるわよ」考えこんでいる柚子をよそに、素子が勝手なことを言う。が、責任の所在を曖昧にしておかないのが素子の性格でもあることを柚子はよく知っていた。

「樋口さん、あなたはどう思う？」柚子が樋口道子の意見を求める。
「そう言われても……」道子が言いよどむ。
「今はオフィスAの状況をどう認識するかなの」柚子が道子の心を探りにかかる。道子はそれにも答えず、
「冊子に愛着はあります。でも最終的には会社の決定に従います」としぶしぶ言った。
「相変わらず大会社の社員みたいなことを言うのね」柚子が皮肉る。
「あなたはどうしたいの？」素子が柚子に聞く。
「降りようと思ってる」柚子は本心を打ち明けた。理性的な結論でないことはわかっている。柚子の結論にギョッとして、道子が、
「ヒット商品を手離すんですか？」と食いつく。
「ケチのついた仕事はしない方がいいの」こんな言い方では道子は納得しないだろうと知りつつ言ってみた。
「斉田部長は女性嫌いなんですか？」道子が変なことを聞く。
「さあ、どうかしら。どうして？」柚子が煮え切らない返事をする。
「私は大企業に少しいましたからわかるんですが、大きな企業の中には女と聞いただけでいっしょに仕事をしたくない男性社員がいるんです。でも……」と道子が言いかけたとき、素子がサッと言葉をはさんだ。
「ホモってない男なら、女大好きにきまってる。どの男もオレは女にモテルって信じてる。斉田さんだって、そう。なのに、仕事となると女が嫌いになる奇妙なイキモノ。斉田さんもそういうイキモノのひとり」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com